

# 特集 文学教材で何を教えるか

## 詩の〈行〉を読む — 萩原朔太郎「旅上」 —

戸塚学

明確なルールを持たない日本の口語自由詩にも形の上での特徴がある。つまり形式である。形式に注目すると、詩の読み方が少し変わる。ここでは『明解国語総合』『精選国語総合』採録の萩原朔太郎「旅上」冒頭四行を取り上げ、形式に着目して詩を読む方法について考えたい。

旅上

萩原朔太郎

ふらんすへ行きたしと思へども  
ふらんすはあまりに遠し  
せめては新しき背広をきて  
さまざまなる旅にいでてみん。

詩の形式の中で最も基本的なものは行

である。行は音や意味の連なりを区切り一定のまとまりを作る。あるまとまりと別のまとまりとの間には関係が生じる。順接や逆接、転換や対比などである。行に注目して読むとは、こうした行と行の間の関係性を読むことである。

だが行を意識して読むことは意外に難しい。前の行から次の行へと続けて読んでいくと行間をつい補って埋めてしまうからである。これは行を一連の文章の一部分として読んでいることを意味する。無意識に行を無化し、散文化しているのである。文章を読むように詩を読む時、行という形式は見失われる。

一つ一つの行は一種の独立した断片である。その意味で行を意識して読むこと

は四コマ漫画を読むことに似ているかもしれない。私たちは四コマ漫画を独立した場面の連続として読む。状況が設定され、展開・転換・オチが来る。コマは自立しつつも前後のコマとつながりを持つ。詩の行もまた、自立する働きと前後とつながる働きをともに持つ。行を意識して詩を読むとは、このような行ごとの切断と連続を読むことにほかならない。

行を意識するために、私は後続の行を紙などで隠して詩を読んでみる。一行読み終えるごとに次の一行を出して読む。行ごとの意味作用を可視化する。次の行が隠されると、ある行の意味作用が次の行でどう引き継がれるかという予期が生まれる。次の行はこの予期に対する答え合わせとして読まれる。隣接する二行の関係性が明確になる。

またある行の言葉がそこに初めて現れた言葉として読まれることになる。意味作用の働き出す瞬間が顕在化する。すると行と行の間に仕掛けられた驚きも看取される。行に注目すると、詩の言葉を新鮮な目で眺め、詩の言葉がイメージや観念を作り出す瞬間を捉えられる。

実際に行に注目して「旅上」を読んでみよう。第一行は「ふらんすへ行きたし

と思へども」である。フランスへ行きたいという話者の願望が提示される。ここで次の行を読まずに立ち止まる。すると行末の「ども」が目にとまる。「ども」は逆接だから、「思うけれど、でも……」という意味である。そうなると第二行の展開が予期される。この話者の願望は叶わないはずなのである。

この予期を踏まえて第二行を読む。「ふらんすはあまりに遠し」と憧れが実現しない理由が示される。予想通りの結末で驚きがない。予定調和である。だがこの予定調和がここでは大切である。

第一行の「ども」により希望が叶わないことは織り込み済みである。だから第二行の「あまりに遠し」に暗さはない。フランスが遠くて行けないのは当たり前で、そのことは挫折の原因にならない。この明るい諦念を打ち出すために第一行の「ども」が効いている。明るい諦念だから第三行・第四行のような展開が生まれる。代替行為としての旅である。前半二行と後半二行の間にはちょっとした転換がある。第三行・第四行をいったん隠して読んでみるとよくわかる。第三行では「新しき背広」を「き」る行為が、第四行では「きままなる旅」に「い

でて」みる行為が提示される。フランスへの憧れから突然、背広であり旅なのである。これは出来事の展開として見るとそれほど自然ではない。フランスに行かないからという理由で新しい背広を着て旅に出る人は、現実にあまりいそうにない。つまり第二行と第三行の間には出来事の自然さに逆らった小さな飛躍がある。

だがそれだけでなく、ここにはイメージの転換が仕組まれている。前半二行と後半二行にそれぞれ現れる名詞を見ると、前半二行で反復された「ふらんす」が後半二行で「背広」「旅」へ入れ替わる。観念的なものから具体的なものへのイメージの転換である。このイメージの転換を行分けが支えている。そしてこの転換に伴い「ふらんす」に託されたまだ見ぬ空間への憧れは「新しき背広」に袖を通す時の期待感や緊張感へと転化される。

このように、行に注目すると、第一行・第二行の間の予定調和が見える。また前半二行と後半二行の間の転換が見える。前半二行の予定調和が憧れを憧れのままに保ち、後半二行の転換が形を持たない心情を具体物のイメージへと転化する。こうして「旅上」は憧れという心情の純粹性を保ちつつ、そのうちにある情

熱や喜びをすくい取って、初春の旅の情景に鮮やかに昇華するのである。以下の詩行は、この旅のイメージをさらに「みづいろ」の窓の外の情景へと開いていく。このような言葉の働きの中心にあるのが、行という形式なのである。

行に注目して読むことは方法である。方法は別の詩に適用できる。ということでは一般化して教えることが可能なもので、読み手が自ら応用できるものである。

大学一年生向けの詩の授業で四行詩を行ごとにイメージ化して四コマ漫画にする作業をしたことがある。題材として工藤直子「のはらうた」を用いたが、授業のテーマは詩人や作品の特徴ではなく詩の行に置いた。個別の詩の解釈は経験としてなかなか積み重ねにくい。だが、方法は経験として積み重ねることができ。詩を読むには散文を読む時と異なる勘所がある。それは多く詩の形式に関わる。そうした詩を読む時の勘所を方法として伝えることで、日常的な言葉と異なる詩の言葉の魅力や面白さを味わう手段を読み手が自らのものとできるように思う。

(とつかまなぶ・常葉大学)